

[エッセイ]

私たちのドイツ留学体験記

佐古井真紀：ゲッティンゲンに留学して

私は三回生の秋学期にゲッティンゲン大学に半年間留学しました。留学経験もなく、ドイツ語も初級レベルだったので、行く前はいろいろなことが不安でした。

ドイツに着いてからも、授業についていくのに必死でした。留学中、私は文法、語彙、発音の三つの語学の授業を受講していました。授業だけでも十分にドイツ語の勉強はできますが、私は現地で学んでいるドイツの方と話す機会が欲しいと思っていたので、留学前に、以前ゲッティンゲン大学に留学されていた先輩にタンデムパートナーを紹介していただきました。また、その人にもう一人日本語を勉強している人を紹介してもらい、留学中は二人のタンデムパートナーと勉強をしていました。ドイツにいる間、私はそれぞれの方と週に2～3回ずつタンデムをしていました。周りの日本人の学生も、私と同じようにタンデムパートナーと勉強をしていましたが、タンデムをしていた回数は私が一番多かったように思います。最初は本当にたどたどしくしか話せなかったドイツ語も、タンデムの回数を重ねるごとにだんだんと話せるようになりました。

一人のタンデムパートナーは私よりも2歳年上の学生で、共通の趣味がきっかけでより仲良くなりました。彼女の実家にも何度か招待してもらいました。彼女の家族にとって、私は初めての日本人だったそうで、私を通して日本文化に興味を持ってくれたことがとても嬉しかったです。さらに、クリスマスにも家に招待してもらい、彼女の家族や親戚と一緒にクリスマスを過ごしました。ドイツでは一般的に家族で過ごすクリスマスに、留学生の私も一緒に参加させてもらい、ドイツの家庭のクリスマスを体験させてもらえたことはとても貴重な経験で、とても楽しい思

い出になりました。そのほかにも、テスト前には勉強を教えてもらったり、色々な場所に連れて行ってもらったり、様々な経験をする中で、自然とドイツ語が身についたように感じました。

留学中はタンデムパートナーの二人を含め、たくさんの人に助けってもらいながら過ごしていました。留学当初は海外の人と関わるのはほとんど初めてだったので、日本人以外と話すときは毎日緊張していましたが、頑張って話しているうちに、挨拶だけでなく、次第に色々な話ができるようになり、ドイツ語の上達を感じるとともに、さまざまな人とコミュニケーションがとれることが楽しいと感じました。私一人ではドイツ語も今のレベルまでは到底上達しなかったと思います。留学中にはアクシデントも多々ありましたが、周りの人の支えがあって、半年間の留学を無事に終えることができました。ドイツでたくさんの人と関わり体験したことは、私にとって本当に素敵な体験になりました。

安田茉央：芸術のドイツ

私は半年間、エアランゲン・ニュルンベルク大学に留学したが、滞在中他の留学生よりも多くの時間を費やしたのは芸術に触れることであった。幼いころからクラシックバレエを習っており、大学でドイツ語を学ぼうと思うようになったきっかけもバレエやコンテンポラリーダンスの影響であったため、実際にドイツへ行くならば、ありとあらゆる芸術に触れたいと思っていた。月に必ず一回は劇場や歴史的建造物を訪れるという目標を掲げ、無事その目標を達成したことで、日本とは異なる芸術との関わり方を知ることができた。

ただ町を歩くだけでも、ドイツにはバイオリンやトランペットを演奏しているストリートミュージシャンが沢山いたが、何よりも劇場等の数の多さは尋常ではないほどに多かったと思う。そしてほとんどの劇場でほぼ満員の公演を毎日行っている。私が留学したバイエルン州のエアランゲンでさえ、町が所有する立派な劇場がエアランゲンの町のシンボルのようにして佇んでおり、そこでも3～4つの演劇作品をほぼ毎日催していた。隣町のフュルトやニュルンベルクではオペラやバレエ、コンテ

ンポラリーダンスを海外から招聘したり、有名な演出家・振付家の作品を気軽に見に行くことができた。何よりうれしいことは、学生には良心的な価格でチケットが販売されていることである。ほとんどの公演で学生料金が設定されていて、通常の半分ほどの値段で観ることもできた。学生の内から、芸術に触れやすい機会が作られていることで、毎日の公演に世代関係なく足を運ぶことにつながっているのであろう。

また気軽に劇場へ足を運ぶドイツの人々は、その作品に合わせた服装で訪れる。例えば、ジルベスターの名物であるオペラ「こうもり」では、綺麗な洋服をきた方々が沢山いた。私は普段通りのカジュアルなファッションで行ってしまったので、かなり浮いてしまったが、留学生かつ学生なので周りの方も大目に見てくれた。また、隣や周りに座っていた見知らぬ方たちと作品の話や、留学の話などを幕前や休憩中にすることで、あっという間に友だちになってしまうことも私の中では劇場内での楽しみの1つになった。

そして、私は劇場に足を運ぶだけでなく、クラシックバレエの教室を探してレッスンに通うことにした。週一回のみであったが、バレエ教室の先生も留学生でも快く受け入れてくださり、有意義な体験をすることができた。バレエの用語は基本的にフランス語からきているが、言語が分からなくても大体の動きは理解できる。しかし、最初はどんなクラスを受けたいか、どのように月謝を支払うのかを相談しなければならない。今までは、ドイツ語の授業でドイツ語の先生と話していたので、簡単な言葉でゆっくりと話してもらって理解することができていた。しかし、バレエの先生や生徒の子たちは、フランケン地方の方言が混じった普段通りの早口で話していて、何を言っているのかさっぱりわからない。私にとって大きな壁だったが、レッスンを受けていくうちに徐々に、注意されていることや言葉の意味を理解することができるようになり、授業ではあまり教われない、日常的に使う実用的な言葉も学ぶことができた。それと同時に、日本とドイツでバレエの動きとしては同じであるにも拘わらず、言葉のニュアンスが違うものもあったことは新しい発見だった。例えば、グラン・ポールドブラという身体を大きく前から横、後ろへと回す動きがあるのだが、ドイツでは円を描く（前から横、後ろからまた横へ）という解釈であった。エアランゲンの町の団体がタッグを組んで、

クリスマスのアドベントのイベントが行われた時に、バレエの発表会に出演することができたことも貴重な体験である。

単に言語を習得するだけではなく、その国の文化や生活習慣をじっくり観察できることが留学の大きな成果だと思う。日本では味わえない芸術に溢れた国ならではの体験を進んで行えたことで、私のドイツでの生活はより充実した期間になった。芸術を通して、日常生活、特に娯楽の過ごし方を感じることができ、これから社会に出る中で幅広い見聞を深めることが出来たと思う。留学で深めた知識や感じた物を自身の今後の活動にも繋げていきたい。

日比野由希：ドイツでの家探し

私は大学三回生の4月から約1年間、ドイツのバーデンヴュルテンベルク州にあるフライブルクへ語学留学した。私の周りは交換派遣留学や認定留学という大学の制度を活用して留学していたが、私は単位認定無しの完全私費で留学した。実は二回生の時にイギリスに単位認定留学したのだが、12月に帰国するや否や「そうだ、春からドイツへ行こう！」と出発3ヶ月前に渡独を決めたので、単位互換制度や奨学金制度についてろくに調べもしないままドイツへ渡った。本当は奨学金も単位も欲しかったが。

エージェントを通さなかったので、語学学校選びには苦労したが、自分の好みとイギリス留学時の反省を生かして、「日本人が少なく、アットホームな校風で、ホームステイ以外の滞在先があって…」等の条件を満たす、良質そうな学校のうち、比較的授業料が安い学校がフライブルクに見つかったので、そこに通うことにした。滞在先は、エンスイート（＝バスルーム付き）で台所が共用の *Studentenwohnheim* と呼ばれる寮を選んだが、そこは7階建ての学生用アパートのワンフロアをその語学学校が借りているようだった。

クラスメイトだけでなくその寮でも友達はたくさんできて、週末にバーベキューをしたり、湖に泳ぎに行ったり、夜ピリヤードをしたり毎日楽しかった。ある日違うフロアの学生（通っている語学学校の生徒ではな

い)と話す機会があり、この寮の一ヵ月の家賃について訊いてみると、彼は360ユーロ払っていると言った。確かにドイツの学生寮にしては高いが、大学付属の学生寮ではないことと、また環境都市でありドイツで最も気候の良い街ということでフライブルクでは総じて家賃も高めなので、これが相場であろう。しかし、フロアが違っただけで同じ間取りに住んでいる私たちは月に760ユーロも払っていたのだった。つまり、手数料として毎月400ユーロも語学学校に搾取されていたということである。渡独前にドイツの家賃相場についてろくに調べなかったのを後悔した瞬間だった。この寮に住んでいる語学学校の生徒の約半数が近隣のスイスから来た留学生で、400ユーロは彼らにとっては安かったのかもしれないが、日本人の、それも円安の時期に渡欧した私にとって400ユーロは大金である。幸い、その事実を知ったのは寮に入ってからまだ1ヶ月ちょっと経った頃だったので、私はすぐさま語学学校へ連絡し、6月末には寮を出て他へいく旨を伝えた。

寮はタイミングよく次の入居者が見つかったのだが、6月末までに次の滞在先を見つけなければならない。通っていた語学学校の斡旋する滞在先の家賃はすべて650ユーロを超えていたので、自分で見つけることにした。あるサイトで「フライブルクでの部屋探しは大変だ」という記事を見たことがあるが、それは本当だった。先述の通り、環境や気候が良いこと、それから総合大学のほかに音楽大学もあるので人気の街らしく、家探しは難航した。ドイツ語がうまく話せないし、7月から3月のたった9ヶ月間だけ、さらに家具付きの物件でないと困る私には、不動産屋で家探しをするのはハードルが高かったので、WGの入居者を募っているポピュラーなサイトを使って家探しをした。例えば海外留学や長期インターンシップ等でWGの1部屋を長期間空ける予定の学生等が、その間の代わりの居住者を探すのによく使われるサイトのような場所や家賃などを考慮しながら、自分に合いそうな部屋を毎日、1日多くて10件ほど更新される空き部屋情報から選ぶ。毎日だいたい2~4件メールを送るのだが、返信は5日に1通くらい。返信が来たら次はその部屋へ見学に行くのだが、私だけではなく他にも見学に来る人はたくさんいて、結局その人たちに取られてしまう。残念だが、ドイツ語が流暢でないわけのわからない外国人より、そりゃあドイツ人に入居してほしいと

いう気持ちは分かるので、めげずにメールを送り続けるしかなかった。結局6月末までに部屋を見つけることはできなかったが、部屋探し中に会った親切な30代くらいのトルコ人&ドイツ人カップルが、次の家を見つけるまで彼らのアパートの一部屋を月375ユーロで貸してくれることになった。彼らは毎日ドイツ語を教えてくれたり、とても優しかった。日本に帰るまでずっと居ていいよ、と言ってくれさえたが、先述のように毎日家探しを続け、8月末にやっと条件に合ったWGへの入居が決まった。とても親切にしてくれた彼らとの別れは辛かったが、やっとちゃんとした住居が見つかってほっとした。

新しいWGは月370ユーロで、フライブルクの旧市街にあるSchwabentorという歴史的建造物にくっついている三角屋根のかわいい建物の最上階だった。6階なのにエレベーターが無いのが難点だったが、旧市街でこの安さ、しかもポストカードにもよく載る建物に住めるというのが何よりうれしかった。それから3月の帰国まで、愉快的な40歳のアメリカ人男性と面白い35歳のイタリア人女性と3人で、ドイツのWG生活を楽しんだ。

このレポートを書かせてくださった独文の教授は「このようなプライベートな留学はこれまでに例がなかった」とおっしゃったが、私は大学の制度を使わず留学して良かったと思っている。もちろん、冒頭で述べたように、単位互換や奨学金は一切なかったし、大学の制度を活用した留学にしておけば、このような家探しのための大変な経験をする必要はなかっただろう。しかし、交換留学や認定留学によくある（私もイギリス認定留学で感じたが）「クラスの大半がアジア人」だとか「日本人以外と話す機会がない」といった問題には全く縁がなかったし、学校に日本人がほとんどいない環境で外国語が学べたことは、留学するうえでとても価値のあることだと思う。また、行きたい国、行きたい街、行きたい学校を自分で選びそれに向けて自分で準備するという経験は、この先必ず役に立つだろう。…が、やはり住む場所というのは本当に大切なので、渡独前にきちんと調べておくのがベストである。